

集団討議における同調行動に自己肯定感が及ぼす影響

堤勇佑・小田千恵子・山之内心・井川純一
(大分大学)

目的

集団討議における同調行動に自己肯定感が影響することが知られている。一方、これらの自己肯定感の影響プロセスは集団の状況によって異なる。例えば、重要度が高い状況では、自己肯定感が低くても葛藤が生じにくい同調行動が低くなるだろう。逆に重要度が低い場面では葛藤が生じやすく同調しやすくなる。そこで本研究では、集団の状況を操作した調査によって、同調行動に自己肯定感が及ぼす影響について検討する。

方法

調査対象 大学生 123 名を対象とした(男性 71 名、女性 51 名)。平均年齢 19.4 歳であった($SD=1.1$)。

質問票の構成 年齢・性別等の個人属性に関する質問票に加え、参加者の普段の自己肯定感を測るために、自己肯定意識尺度(平石, 1990)から 32 項目を使用し、5 件法で評定した。次に、参加者の普段の同調行動を測るため、33 項目の質問で構成される同調志向尺度(横田・中西, 2011)を使用し、5 件法で評定した。さらに、シナリオの状況で実験参加者の同調行動を測定するため、同調志向尺度から抜粋・編集した同調得点 14 項目を使用し、14 項目を 5 件法で評定した。

分析 同調得点を従属変数とし、性別、年齢及び個人特性を Step 1、重要度と自己肯定感の交互作用を Step2 で投入した階層的重回帰分析を行った。

結果

尺度の分析 自己肯定意識尺度(SE)及び同調志向尺度(CO)については、先行研究と同様の因子構造を採用した。それぞれの α 係数は、自己受容(SE, $\alpha=.76$)、充実感(SE, $\alpha=.87$)、自己表明・対人積極性(SE, $\alpha=.82$)、被評価意識・対人緊張(SE, $\alpha=.81$)、規範的影響項目(CO, $\alpha=.87$)、情報影響項目(CO, $\alpha=.76$)であった。同調得点については、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行い、同調($\alpha=.91$)、発言積極性($\alpha=.86$)、葛藤($\alpha=.81$)の 3 因子を抽出した。

階層的重回帰分析 従属変数が同調の場合、重要度($\beta=-.38$)、性別($\beta=.18$)、規範的影響項目($\beta=.44$)において有意な偏標準回帰係数が認められた($R^2=.52$)。なお Step2 においては、有意な説明率の上昇が認められなかったため、Step1 を採用している。Step2 を採用した(交互作用が認められた)発言積極性及び葛藤を従属変数とした階層的重回帰分析の結果を Table 1 に示す。交互作用の分析の結果、自己受容が高い人は、重要度が低い場合には発言積極性が低くなるが、重要度が高い場合は発言積極性が高くなるという有意な傾斜($y =$

$0.97^{**}x + 2.65^{**}$)、自己受容が高い人は、重要度が低い場合には葛藤が高くなるが、重要度が高い場合は葛藤が低くなるという有意な傾斜($y = -1.11^{**}x + 3.28^{**}$)、被評価意識・対人緊張が高い人は、重要度が低い場合には葛藤が起きるが、重要度が高い場合は葛藤が起きにくくなるという有意な傾斜($y = -0.90^{**}x + 3.44^{**}$)が認められた。

Table 1 同調行動に自己肯定感が及ぼす影響

	発言積極性	葛藤
重要度(0=低, 1=高)	.26 **	-.28 **
性別(0=男性, 1=女性)	-.20 *	.08
年齢	.08	-.14 *
自己受容(SE)	.07	-.26 **
充実感(SE)	-.15	.11
自己表明・対人的積極性(SE)	.24 *	.16
被評価意識・対人緊張(SE)	.11	-.09
規範的影響項目(CO)	-.46 **	.37 **
情報的影響項目(CO)	.03	.39 **
重要度*自己受容	.22 *	-.30 **
重要度*充実感	.06	-.02
重要度*自己表明・対人的積極性	-.04	.00
重要度*被評価意識・対人緊張	.10	-.19 *
R^2	.52 **	.58 **
ΔR^2	.05 *	.09 **

考察

本研究の結果から課題の重要度が高い場面では同調行動が起こりにくいことが明らかになった。また自己肯定感の中でも自己受容と被評価意識・対人緊張が同調行動に影響を及ぼすことが明らかになった。

人生において重要度が高い場面や周囲を気にする余裕がなくなると同調行動が起こりにくくなる。また、自己肯定感が高い人は、重要度が高い場合に比べて低い場合のほうが同調行動は起こりやすくなる。これは、現代青年の対人関係が希薄であることから、自己肯定感の高い人でも重要度が低い場面では同調行動が起こりやすくなっていると考えられる。

引用文献

- 平石 賢二(1994). 青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅰ)—自己肯定性次元と自己安定性次元の検討— 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 37, 217-234.
横田 晋大・中西 大輔(2011). 同調志向尺度の作成—規範的影響と情報的影響— 広島修大論集, 51(2), 23-36.